

三方よし

藤枝市立藤枝中央小学校



「蜘蛛の糸」から思うこと

校長 新村和彦

「蜘蛛の糸」は、芥川龍之介作品の中でも1番好きな作品です。(と言っても、そんなに芥川作品を読んでいるわけではありませんが・・・) 誰でも1度は、読んだことのある作品だと思いますが、あらすじを紹介します。

あらすじ

主人公は、犍陀多(かんだた)という男。この男は、地獄に落ちるまでに、人を殺したり家に火をつけたりと、多くの悪事をはたらいた大泥棒です。しかし、犍陀多は、生きていた間に1回だけよいことをしたのです。

そのよいこととは、小さな蜘蛛の命を救ったことでした。犍陀多は、あるとき、道端を這っている小さな蜘蛛を見つけました。踏み殺そうとしたのですが、「いや、いや、これも小さいながら、命あるものにちがいない。その命をむやみにとるということは、いくらなんでもかわいそうだ。」と思いとどまり、蜘蛛を殺さず、助けてやったことがあるのです。

ある日、地獄の底で、ほかの罪人たちとうごめいている犍陀多の目の前に、極楽から1本の蜘蛛の糸がおりてきました。この蜘蛛の糸は、犍陀多が生前、小さな蜘蛛の命を救ったことを思い出したお釈迦様が、犍陀多を救い出してやろうと垂らした蜘蛛の糸だったのです。

犍陀多は、地獄から抜け出そうと、必死にその糸を上り始めます。しかし、犍陀多と同じように、地獄から抜け出そうとする多くの罪人たちも、上へ上へとよじ上ってきます。蜘蛛の糸は、とても細いのです。糸が切れてしまえば、がんばって上ってきた犍陀多の苦労が報われません。そこで、犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。このくもの糸はおれのものだぞ。おまえたちはいったいだれにきいて、のぼってきた。おりろ。おりろ。」と喚いたのです。

そのとたん、今まで、なんともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっているところから、ぶつりと音を立てて切れたのです。犍陀多はみるみるうちに閻の底へ落ちていきました。(参考：講談社 青い鳥文庫「くもの糸・杜子春」)



私が、蜘蛛の糸が好きな理由は、大きく4つです。



- ①「もともと悪い人間なんていない。」と感じさせる犍陀多の行い。
- ②地獄から抜け出すために、自分だけが助かろうとする犍陀多の欲深さに思わず共感してしまう。
- ③丁寧語を使った文章によって、お釈迦様が、極楽から地獄を見ている構図を、上手に表現している。
- ④悪いことをすれば、それなりの報い(「蜘蛛の糸」の場合は、地獄に落ちる)を受けるといった道徳的な教えを感じる。

①「地獄に落ちるまでに、人を殺したり家に火をつけたりと、多くの悪事をはたらいた大泥棒なのに、何で、小さな蜘蛛なんか助けたのだろう。」と誤ってしまいます。しかし、この場面から、「心底悪い人間なんていないよ。」「誰だって、よいところがあるんだよ。」という芥川さんのメッセージを感じるのには、私だけでしょうか・・・?

②地獄の底の血の池で、多くの罪人たちとうごめいても、自分だけが助かろうとする犍陀多の欲深さです。だからこそ、人を殺めたり人の悲しみを感ぜない身勝手な行動が取れるのだろうなと妙に納得してしまいます。

※あなたが、犍陀多だったら、蜘蛛の糸をよじ上ってきている罪人たちに、何と声をかけますか?(私だったら、「糸が切れちゃうから、一人ずつ順番に!!!」・・・かな?)